



野鳥の 不思議解明 最前線 #99 文 植田睦之

© Japan Bird Research Association, 2013

巣にやってきたアオゲラ。キツツキのヒナはかなり賑やかだが、捕食者が近づいたとき、親は鳴き止ませるための警戒声を出したりするのだろうか？ 撮影●内田博

鳴くべきか？ 鳴かざるべきか？

～状況に応じて警戒声をあげるマミジロヤブムシクイ～

新年あけましておめでとうございます。バードリサーチも10年目を迎えました。皆様のご協力のおかげで、これまで、季節前線ウォッチや各種のモニタリング調査などで成果をあげることができました。今後もさらに活動を活発に進めていきたいと思っておりますので、引き続きのご支援をよろしく願いいたします。そんなお礼も兼ねて、先日、10周年記念集会を立教大学で開催しました。定員を超える多くの方に参加いただきました。講演会終了後、参加していた学生さんから相談を受けました。「オオタカの研究をしたいんだけど、巣が見つからないんです。どうしたらよいでしょう…。以前はオオタカの巣は、ありそうな場所の、あたりさえつけば、あとは踏査すれば、オオタカが警戒声をあげるので、簡単に巣を見つけることができました。しかし、最近は警戒声を出さないオオタカが多くなって、巣を見つけるのも大変なんですよ。

このように、警戒声はつがい相手やヒナに危険を知らせる機能はあるものの、逆に巣を見つけれられる危険もあります。オーストラリアに生息しているマミジロヤブムシクイ *Sericornis frontalis* はそのところをわきまえて、鳴くべきときには警戒声をあげ、鳴かざるべき時には鳴かないようです。HaffさんとMagrathさんは、このことを確かめるために、野外実験を行ないました。巣のそばにスピーカーを設置して、ヒナの餌乞声をながしたり、ながさなかったりして、巣が捕食者に見つかりそうな状況と、見つ

かりにくい状況をつくりました。あわせて、ヒナや卵を捕食するフエガラ *Sericornis frontalis* のモデルと、無害なアカクサインコ *Platycercus elegans* のモデルを見せた場合の反応をみてみました。

すると、ヒナが鳴いていて、ヒナに捕食者の接近を知らせた方が良い時に、捕食者が近づいた場合には警戒声を多くあげることがわかりました。また無害なインコの場合にはそのような反応はみせず、警戒声でない地鳴きでは、そのような違いがないことがわかりました。マミジロヤブムシクイは鳴くべき時に警戒声をあげているようなのです。

シジュウカラの親は、捕食者がカラスなのかヘビなのかに応じて、違う警戒声をだし、ヒナもそれを聞いて巣内で伏せるか、巣から飛び出すか決めます (Suzuki 2011)。鳥たちは、状況に応じて、さらにさまざまな鳴き声を使って、複雑なコミュニケーションをとっているようです。高性能なICレコーダの普及で、学会大会でも声の研究が増えてきています。今後のこの分野の研究の発展がすずめば「パウリング」の鳥版みたいなのができるかな？

紹介した論文

Haff, T.M. & Magrath, R.D. (2013) To call or not to call: parents assess the vulnerability of their young before warning them about predators. *biology Letters* 9: 20130745. doi: 10.1098/rsbl.2013.0745.

Suzuki, T.N. (2011) Parental alarm calls warn nestlings about different predatory threats. *Current Biology* 21:R15-R16.